

琵琶湖の漁獲量は1955年をピークに減り続けています。その背景には、魚の産卵繁殖場が減少したことや水草の過剰な繁茂、外来魚やカワウによる食害など、様々な原因が考えられます。

1. 琵琶湖で漁獲される魚介類

ニゴロブナやホンモロコ、ビワマス、セタシジミといった琵琶湖にしかいない魚介類（琵琶湖固有種）のほか、アユやスズエビなど様々な魚介類が漁獲されています。ニゴロブナはふなずしの原料としてよく知られています。

2. 琵琶湖の漁獲量(図4-8-1、図4-8-2)

1955年には1万トンもの漁獲量がありましたが、2022年には701トン（オオクチバス等の外来魚を除く）にまで減少しています。

(1)アユ

琵琶湖漁業で最も漁獲量が多い魚種であり、食用として利用される他、姿形が美しく、友釣りによく釣れることから、「琵琶湖産アユ」として養殖用や河川放流用の種苗として利用されています。

漁獲量は1991年をピークに減少しています。近年では、湖内での餌不足に起因すると考えられる成長不良や、気候変動に伴う河川の高水温化等により、産卵量が激減する年が度々発生し、資源の不安定化と低迷を招いています。

(2) ニゴロブナ、ホンモロコ

ニゴロブナは外来魚のオオクチバスが増えた1985年頃から減少しました。ホンモロコは産卵期に琵琶湖水位が急激に低下し、多くの卵が干上がった1995年を境に急激に減少しました。近年では、両魚種とも種苗放流やヨシ帯造成、外来魚駆除、資源管理などの取組により、資源量は回復傾向にあり、漁獲量も回復の兆しが出てきています。

(3) セタシジミ

1950年代には5000トン～6000トンの漁獲がありましたが、近年では40トン程度まで減少しています。砂地が減ったことや水草が過剰に繁茂したところでは湖底の泥化が進み、生息場所が少なくなったことが減少原因と考えられています。

3. 漁獲量を増やすための取組

稚魚や稚貝の放流、魚類の産卵繁殖の場となるヨシの植栽、水草の刈り取りや外



来魚の駆除など様々な取組が行われています。また、漁業者によって、漁獲を自粛する期間や区域の設定など資源管理の取組が行われています。

4. 他の水産振興に係る取組

漁獲量を増やす取組に加えて、漁業の担い手確保や琵琶湖産魚介類の魅力を発信し消費の拡大を目指した取組も併せて進められています。

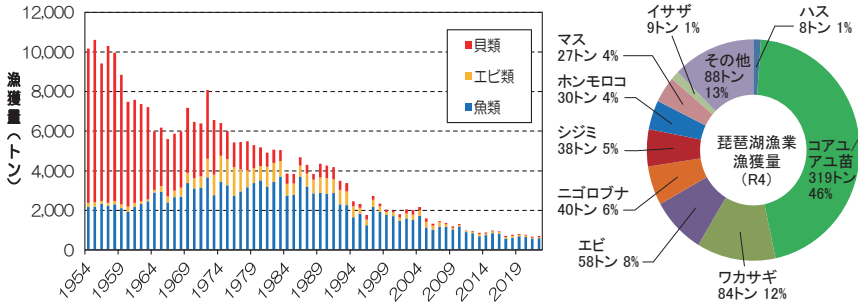


図4-8-1 琵琶湖漁業の漁獲量の推移と内訳
滋賀農林水産統計年報(農林水産省)、内水面漁業生産統計調査(農林水産省)より

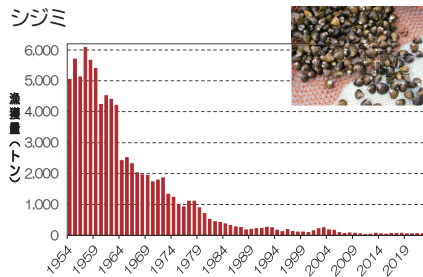
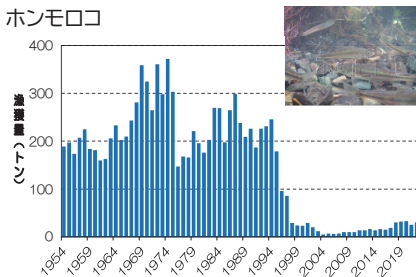
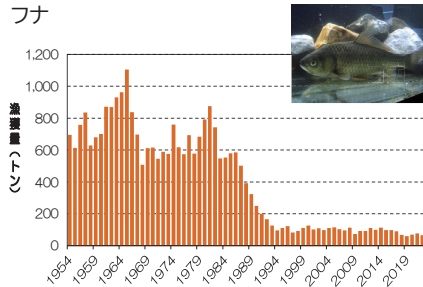
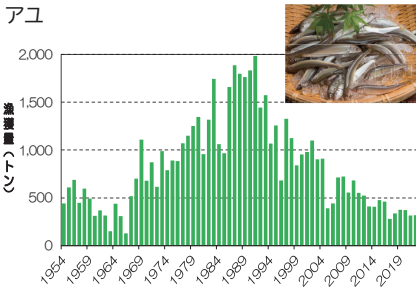


図4-8-2 アユ、フナ、ホンモロコ、シジミの漁獲量の推移
滋賀農林水産統計年報(農林水産省)、内水面漁業生産統計調査(農林水産省)より

水産課